

AXIES 国際連携室企画 EDUCAUSE 2022 派遣事業参加報告書

学校法人沖縄科学技術大学院大学
IT ディビジョン／運用サポートセクション
松浦 孝紀

1 はじめに (EDUCAUSE の概要)

EDUCAUSE とは、情報通信技術 (ICT) を活用して高等教育を発展させることを目的とした米国の非営利団体であり、日本を含め世界各国の総合大学からコミュニティ・カレッジまでの幅広い高等教育機関や、高等教育機関向けに ICT サービスを提供する企業、その他関連する協会や組織が会員として加盟することができる。現在は、約 2,300 校の大学や教育機関、約 300 社の企業、約 16,500 名の正会員で構成されている。

今回参加した EDUCAUSE Annual Conference は毎年秋頃に開催されている大規模なイベントであり、高等教育に関する様々な ICT 関連の情報共有の場や、人的ネットワークを形成する場として活用されている。コロナ禍直前に行われた 2019 年時の Annual Conference では全世界から 8,000 名を超える参加者が一同に集ったが、コロナ禍以降、2020 年はオンラインのみ、2021 年はオンサイトとオンラインの同時開催、そして今回 2022 年は初めてオンサイトとオンラインを別々で開催する形となった。

今年のオンサイトは、コロラド州デンバーにて 10 月 25 日～28 日の 4 日間（初日: 主にプレカンファレンス・ワークショップ、残り 3 日間: 基調講演を含む多数の講演・パネルディスカッション等）にわたって開催され、オンラインは 11 月 2 日～3 日の 2 日間（ライブセッション、オンサイトの録画セッション、ポスターセッション等）にわたって開催された。オンサイトでは約 6,500 名、オンラインでは約 600 名の参加があった。日本からは、参加募集段階の日本の出入国制限が厳しかった影響もあり、オンサイト参加は教育機関から 3 名（著者含む）、企業から 1 名のみ、オンライン参加は教育機関から 3 名の参加があった。

本報告書では著者が現地デンバーにて参加したオンサイトのみに絞って報告する。

2 セッションに関して

2.1 概要

年次大会では開催期間中の 4 日間で 300 以上のセッションが開催され、十数ものセッションが同時時間帯で行われるため、興味のあるセッションでも時間帯が重複して参加することができないものも多数あった。扱われるテーマの範囲は、教育・学習、リーダーシップ、サイバーセキュリティ・プライバシー、インフラ・ネットワーク、ポリシーなど多岐にわた

っている。今回、著者自身が初参加であったため、それぞれのカテゴリから興味のあるセッションをピックアップし、なるべく多くの分野に満遍なく参加することとした(表1参照)。

セッションのカテゴリとしては、下記の8つがあった。

☆ セッションのカテゴリ ※()内はセッション数

- Teaching and Learning (73)
- Leadership and Future Workforce (105)
- Cybersecurity and Privacy (30)
- Student Engagement and Success (59)
- Innovation and Emerging Technologies (82)
- Supporting Research Computing (4)
- Infrastructure and Networking (20)
- Policy and Law (9)

全セッションのタイトルを抜き出し、ワードクラウド化した画像を図 1 に示す。このワードクラウドが示すとおり、DX 関連や学生、教育や学習のようなキーワードを扱うトピックが比較的多かった。

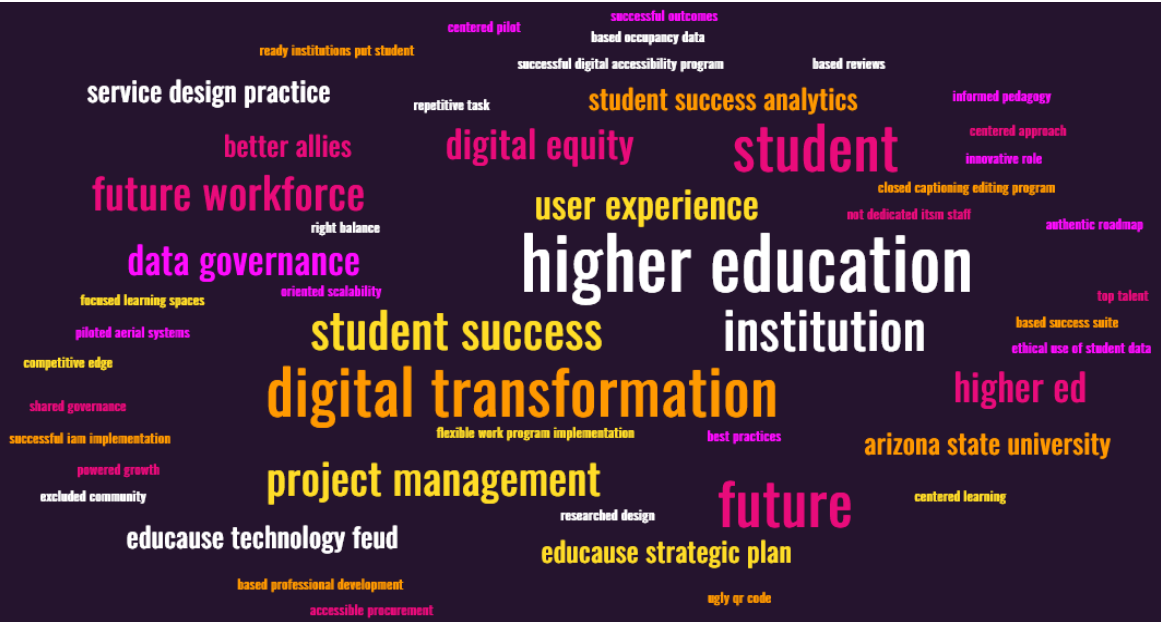


図 1：セッションタイトルのワードクラウド

Generated by MonkeyLearn.com

表 1：参加セッション一覧

セッション名	カテゴリ	セッション概要
A Fireside Chat with Kara Swisher	Keynote	オープニングのキーノートセッション。EDUCAUSE のミッションやビジョン、コアバリューや中長期計画にとどまらず、世界情勢、アメリカの政治についてなど、幅広いトピック。
Delivering Next-Generation Analytics and Insights	Innovation & Emerging Technologies	キャンパス内の既存のデータを活用し、次世代分析を追求するユニークな方法の紹介。例えば、無線データを活用し、学生の行動やキャンパスリソースの利用状況を可視化、行動データを分析して、キャンパスでの学生がどのような恩恵を受けたか、など。
Continuous Course Improvement with Learning Analytics Dashboards	Teaching & Learning	学生へのパーソナライズ化のための学習分析ダッシュボードの紹介。コース設計者がコース設計やレビューのための具体案など。
Higher Education's Top 10 IT Issues for 2023	Keynote	毎年 EDUCAUSE 年次大会で発表される翌年の IT に関連する 10 大課題。
Cybersecurity Strategies for the Hybrid Campus	Cybersecurity & Privacy	ゼロ・トラスト・アーキテクチャーにおけるリスク軽減のためのヒントを紹介。ポストパンデミックにおけるハイブリッドキャンパスのサイバーセキュリティの脅威に直面しながらも、教職員、学生のために柔軟性と俊敏性をどのように提供するか、など。
Overcoming Market Challenges in Higher Education IT Organization Design and Operation	Leadership & Future Workforce	IT 予算の縮小、セキュリティ脅威の増加、人材確保難など、様々な課題を解決するための戦略をいくつか紹介。
Reaching Students Where They Are: The Power of Data and Analytics	Student Engagement & Success	入学率と卒業率の低下を分析し、大学での経験をパーソナライズした戦略ガイダンスを説明。
A Year-End Review from the EDUCAUSE/HP XR Community of Practice	Community Group	高等教育での XR 技術を用いたこれまでの普及活動や事例の振り返り。
Envisioning the Digital Campus Experience	Student Engagement & Success	デジタル・キャンパス・アプリケーションの現状と将来に関するパネルディスカッション。学生の成功とエンゲージメント、コミュニケーション、データ統合、戦略的目標の達成など、キャンパスアプリのベストプラクティスを紹介。

Catapulting Telecom into the Modern Age at a Small Liberal Arts College	Infrastructure & Networking	電話サービスを従来のオンプレ型 VoIP システムから Zoom Phone に移行したプロジェクトの紹介。固定電話機のコスト削減や昨今のリモートワークへ適した環境などのメリットなど。
A Conversation with Priya Parker, Author of “The Art of Gathering”	Keynote	マスターファシリテーターかつ戦略アドバイザーのプリヤ・パーカー氏と EDUCAUSE CEO のジョン・オブライエン氏とのクロージングトークディスカッション。

2.2 代表的なセッションの紹介

表 1 の参加したセッションのすべてについて紹介するスペースがないため、ここでは特に興味深かった下記のセッションについて簡潔にまとめる。

- Top 10 IT Issues for 2023
- Catapulting Telecom into the Modern Age at a Small Liberal Arts College

● Top 10 IT Issues for 2023

EDUCAUSE Annual Conference では毎年、翌年度の IT に関連する 10 大トピックを発表している。以下では著者が簡潔にまとめたものを紹介する。詳細は下記ウェブサイト（英語）にて公開されている：

<https://er.educause.edu/articles/2022/10/top-10-it-issues-2023-foundation-models>

① *A Seat at the Table*

大学の戦略立案において、CIO・IT リーダーもその場に同席し検討会に加わる必要性。

② *Privacy and Cybersecurity 101*

教職員・学生へのプライバシーとサイバーセキュリティの教育・意識向上。

③ *Evolve, Adapt, or Lose Talent*

在宅勤務などの職場環境やワークライフバランス向上に対して真摯に向き合わないと、優秀な IT 人材が外へ流出してしまう懸念。

④ *Smooth Sailing for the Student Experience*

テクノロジーやデータ分析を行い、学生への快適な学校生活を提供することの必要性。

⑤ *Enriching the Leadership Playbook*

IT 人材を惹きつけ、成長させ、留めておくための戦略。

⑥ *Expanding Enrollments and the Bottom Line*

出願者の ROI 分析による高いポテンシャルを秘めた教育プログラムを策定し、データ収集・分析の取り組みへの集中化。

⑦ *Moving from Data Insight to Data Action*

データ分析から実行への転換期、組織のパフォーマンス強化、業務効率化、学生成功体験の向上。

⑧ *A New Era of IT Support*

リモートワーク/ハイブリッドワークをサポートする今後の IT サービス戦略。

⑨ *Online, In-Person, or Hybrid? Yes*

対面授業やオンライン授業だけでなく、HyFlex 授業（対面・オンライン授業の同時開催）の必要性。

⑩ *SaaS, ERP, and CRM*

新しい ERP ソリューションへの投資におけるコスト、リスク、価値の管理。

課題としては上記の通り 10 項目挙げられているが、その 10 項目を分類すると大きく下記 3 つに分けらる。以下、それぞれの分類に対して分析した解釈を付す。

i. *"Leading with Wisdom"* (①、③、⑤)

今後益々 IT リーダーに求められる比重が大きくなる。その中で、大学の戦略立案など、経営トップの重要な会議に、CIO・IT リーダーは必ず同席して、検討に加わる必要がある。また、(米国内では) 今まで CIO の位置づけは学長直下、財務直下、又は Provost 直下の 3 パターンがあったが、これからは学長直下がトレンドになる。また、IT 部門内の働く環境や IT 戦略、人材育成等の取り組みに真摯に向きあう必要があり、それを怠ると優秀なスタッフが離れていく懸念が挙げられる。

ii. *"The Ultra-Intelligent Institution"* (②、④、⑥、⑦)

AI などの最新テクノロジーやデータ分析などがより重要になってくる。出願者を含めた学生に対して、よりよいサービスを提供するためのデータ収集及び分析の必要性を説いている。一方、サイバー攻撃の脅威や GDPR・ADPPA など個人情報の取り扱いに対してかなり慎重に取り組む必要があり、セキュリティやプライバシーを守りつつ如何にデータを収集すべきかのガバナンスが重要となっている。

iii. ***“Everything Is Anywhere”*** (⑧、⑨、⑩)

COVID-19 パンデミック禍によりリモートワークへシフトしたことによって IT サポートの幅がかなり広がった。それを前提に再度見直して戦略を立てる必要がある。また、対面授業やオンライン授業は既に行われているが、今後は更に HyFlex という対面とオンライン混合での授業も整備され一般化されていくだろう。あと、ERP などの基幹システムも今クラウドへシフトしており、BI など新たな機能も実装されているので、未だに古いレガシーシステムを利用しているのであれば、基幹システムも刷新する必要がある。

上記 2023 年度の Top 10 IT Issues を要約すると、IT 人材と予算の確保、サイバーセキュリティ & プライバシー、オンライン・リモートといった課題のほとんどが日本にも当てはめることができる。一方、米国特有の状況として、産業界における IT エンジニア給与の高騰や（日本の比ではない）、2025 年から入学者数が減少傾向に入るのでパイの取り合いが激化するという切実な問題もあり、それらの課題にどう取り組むべきか戦略を練る必要があるとのことである。

● **Catapulting Telecom into the Modern Age at a Small Liberal Arts College**

時間や場所、デバイスを選ばずに誰とでもコミュニケーションをスムーズに行え、かつ統一された UI/UX でビジネスにおける情報伝達の効率化を図るソリューションとして Unified Communications (UC) というコンセプトが登場した。その UC に加えて、更にファイル共有やタスク管理などのコラボレーションツールを統合し、離れている相手との共同作業を可能にする Unified Communication and Collaboration (UCC) も台頭してきている。

本セッションでは、リベラルアーツ系の College における UCC 戦略の 1 つのアイデアとして、電話を Zoom Phone に移行したプロジェクトの紹介であった。

パンデミック禍以前、その College 内には Slack や Teams、Zoom など様々な UCC ツールがあり、ユーザーは自身の好みのツールを勝手に選択して利用していたため、デジタルでのコミュニケーション分断が生じた。パンデミック禍の直後、早急にハイブリッド学習やハイブリッドワークへ移行する必要がある、この College の一番重要な UCC ツールとして Zoom が定着してきたため、デジタルキャンパス体験の一部として、電話の機能を Zoom に移行した。それより、自宅にいながらパソコンや個人所有のスマートフォンで職場の電話を受け取ることができるようになり、デスクフォンの台数削減を実現し、固定資産費の削減にもつながっている。また、更なるコスト削減策の一環として、IT 部門では先行して、ビジネス用に提供していた携帯電話を回収し、個人所有のデバイスを仕事で利用する方針を推奨した。

また補足として、米国では緊急通報である E911 に関する「Ray Baum’s Act」と「Kari’s

Law」という法律が数年前に運用開始（適用）され、Zoom Phone のようなソフトフォンでも端末の場所や Emergency Call が必須化されていたので、その法律に則って E911 の設定も行っている。

3 オンサイトのイベント会場について

ここでは 6,000 人以上もの参加者が一同に集まった会場の雰囲気を伝えるために、オンサイトのイベント会場で撮影した写真を掲載する。

まずは、イベント会場入り口付近を写真 1～7 に示す。イベント会場入口の参加受付のレセプションから規模の大きさが伺える。

写真 1：イベント会場入口①



写真 2：イベント会場入口②



写真 3：会場マップ（背景にマスコットの熊）



写真 4：会場のマスコット（巨大な熊）



また、会場の通路もかなり広いため、通路スペースにはイベント期間中にライブトークが繰り広げられる特設スタジオや、VR などのデモを紹介している場所、企画セッションを実施する場所も複数設置されていた。

写真 5：通路スペースでの特設スタジオ



写真 6：化学薬品を取り扱ったセーフティトレーニングの VR デモ



写真 7：通路でのセッション開催風景



General Session で使用される一番大きな会場は数千人規模の参加者が収容でき、実際キーノートではほぼ全ての席が埋まっていた（写真 8～9 参照）。

写真 8：大会場の入り口

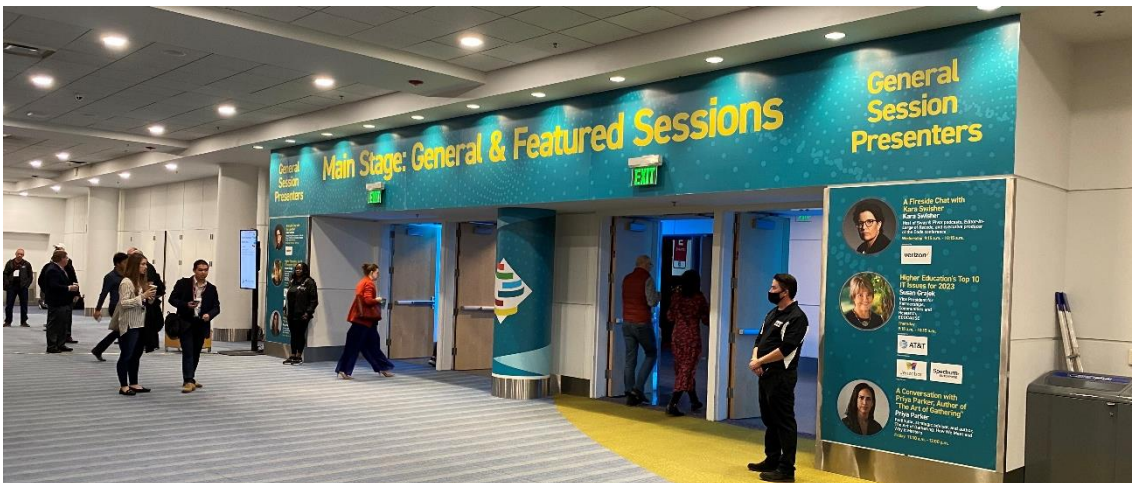


写真 9：大会場でのキーノート講演の風景



4 フランス代表团とのコラボレーション

今回の EDUCAUSE 開催期間前後に、フランス代表团総勢 12 名と共にデンバー周辺の 4 団体（コロラド大学ボルダー校、コロラドコミュニティカレッジシステム、デンバーコミュニティカレッジ、Internet2）へ訪問し、各団体の IT 関連部門の関係者との情報交換を行った。フランス代表团は毎年 EDUCAUSE カンファレンスレポートを仏・英両言語にて公開配布しているが、今回は日本代表团（AXIES 国際連携室 EDUCAUSE 派遣事業）と共同執筆することになっている。この EDUCAUSE カンファレンス報告書に加えて、日仏共同の EDUCAUSE カンファレンスレポートを日本語でも公開する予定である。ご興味ある方は是非ご一読頂ければ幸甚である。

5 まとめ（振り返り）

以上のように EDUCAUSE 2022 ではパンデミック禍前のような活気が戻ってきたように感じられた。その中でこの 4 日間を振り返ると、“Personalization”や“Student Experience”、“Student Engagement”、“Student Success”という言葉をよく耳にし、より学生にフォーカスしている傾向が見られた。今後、学生が減少していく中で、如何にして多様化する学生の関心を引き付けられることができるか、限られたパイを取り合って生き残っていくのが各大学の一つのキーになっているとひしひしと伝わってきた。

並行して、プライバシーに関してはサイバーセキュリティ以上に関心の高いトピックとなっており、質疑応答でも個人情報の取り扱いについて質問している参加者も何人か見受けられ、プライバシーをどのように守るかは日本以上に敏感になっているように感じました。できる限り学生の行動原理や関心事などの個人情報を収集・分析し、大学戦略の一環として有効的なデータを活用したいという思いの一方、倫理的に問題ないシステムをどのように構築するのか、ガバナンスの策定も重要課題となっている。

また、セッション内容以外では米国ならではの非常に印象深かった点が 2 つあった。まず初めに、圧倒的な女性の活躍である。日本の教育業界において、IT 部門では男性の比率が多く、特にマネジメント層では男性が圧倒的多数であるが、セッションで登壇・紹介される IT 部門スタッフの多くは女性で、かつ CIO・IT 部門長などのマネジメント層では半数以上が女性ではないかというほど女性比率が非常に高かった。そして 2 つ目として、COVID-19 の対応状況である。日本はまだ「With Pandemic」の状況に対して、米国はすでに「Post Pandemic」へシフトしていると感じた。

このように、今回の米国出張では色々な学びを体験できた。常に先進的な取り組みを実践している米国での ICT や教育業界全体を実際に見聞きすることで、我々日本の大学に今後どう活かせるのか、中長期計画を練る上で非常に勉強・参考になった。今後も機会があれば引き続き EDUCAUSE Annual Conference に参加していきたいと思う一方、昨今の円安や米国内のインフレ、大学予算削減の影響もあり、出張予算の確保が非常に厳しいのも現実である。次回現地に参加できなかったとしても、オンラインや Top 10 IT Issues の無料公開レポートなど、可能な範囲で情報収集を行っていきたい。

次回の EDUCAUSE Annual Conference は、2023 年 10 月 9～12 日にシカゴにて開催されることが決まっている（オンラインは米国日時の 10 月 18～19 日）。

6 謝辞

最後になりましたが、今回初めての EDUCAUSE 派遣事業を企画・遂行して下さった AXIES 国際連携室長の山田先生（放送大学）及び室員の梶田先生（京都大学）をはじめ、この度の出張での多大なるご支援を頂きました事務局の皆様、並びに、デンバー近辺の団体への訪問をアレンジして頂いたフランス代表団の John Augeri 先生（パリデジタル大学）をはじめとする他 11 名の先生方には大変お世話になりました。この場をお借りして皆様にお礼申し上げます。